

氏名(国籍)	張 磊(中国)
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	博甲第2227号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	戦後日本における大学教育の展開 —学部・研究科の種類の変化を中心に—
主査	筑波大学教授 博士(教育学) 清水一彦
副査	筑波大学教授 教育学博士 堀和郎
副査	筑波大学教授 博士(教育学) 山本眞一
副査	筑波大学教授 諏訪伸夫

## 論文の内容の要旨

### 1. 論文の構成

本論文は、序章、第1章～第6章、終章から構成されており、本文238ページ(1ページ当たり1,200字、400字詰め原稿用紙で714枚に相当)、資料38ページから成っている。

### 2. 論文の内容

本論文は、大学の学部・研究科の変遷をその量及び質という観点からとらえ、戦後日本の大学教育の展開過程を明らかにするとともに、中国の大学教育の発展や大学の配置計画に示唆を得ることを意図したものである。日本の大学大衆化や大学教育の発展については、これまで在学者数や進学率などの量的変化を中心にとらえられてきたが、本研究では、質的側面においても変化が生じているはずであるという認識に立ち、その一側面として学部・研究科の種類の変化に着目し、とくに専門分野の変化を追うことによって大学教育の多様化・高度化・個性化が進められてきた過程を分析・考察しようとした。

この目的を達成するための具体的課題として、次のような3つの課題が設定された。

- (1) 大学数・学生数・学部数等の量的変化を総体的に把握すること。
- (2) 学部・研究科の種類や専門分野の変化を詳細に追跡することによって、大学大衆化が同時に大学教育の多様化・高度化・個性化を伴っていることを明らかにすること。
- (3) 専門分野の変化の社会的背景・要因を明らかにすること。

研究方法としては、まず、各年度版文部省『全国大学一覧』や『学校基本調査報告書』、各大学の史誌等の資料を利用して、学部・研究科の設置及び種類の変化に関するデータを設置者別・年代順でコンピュータに入力し、そのデータベースを作成した。そして、変化の全体像を明らかにしながら戦後の大学教育の展開を4期に区分した。

次に、各期における学部・研究科における専門分野での変化の特徴を把握するとともに、その変化をよりミクロにとらえるために個別大学での学部・研究科等の組織改組・再編に関する事例分析を行った。専門分野の変化の社会的背景・要因については、国家・企業・個人→時代的・社会的要請＝①学問研究の推進、②専門人材の育成、③学習欲求の満足→大学側の対応＝学部・研究科の設置と変遷、という図式に基づく分析枠組みを設定した。

各章の概要は、以下の通りである。

第1章では、「前史」として戦前の大学を含めて日本の大学教育の発展過程について、量的変化と専門分野の変

化の両側面からとらえ、その歴史的展開の全体像を描いた。そして、時期区分の確定と同時に、新種学部・研究科の創設や専門分野の増加と関連づけながら大学大衆化の特徴を明確にした。

第2章では、戦後日本の大学大衆化における学部の種類の変化を、第3章では修士課程研究科の種類の変化を、第4章では博士課程研究科の種類の変化を、それぞれ具体的に取り上げ、まず各4期ごとにそれぞれの種類の変化の全体的特徴を、次に、法文系、理工系、医学系、教育系、その他の分野という類型に従って専門分野の変化を分析・考察した。その結果、従来の伝統的学問分野において学問研究の細分化・総合化・学際化がみられ、多くの専門分野に分化・発展してきていること、また時期ごと、分野ごと、学部・修士課程・博士課程といった段階ごとにその変化の様相が異なっていることを明らかにした。

第5章では、大学の分類や改革の実態に即して7つの類型において合計15の個別大学を取り上げ事例分析を行った。その結果、規模の拡大に力点を置いた大学、学部・研究科の増設や新種学部・研究科の創設を図った大学、自らの伝統を継承しつつ既存の組織の改組・再編を通して新しい学科や専攻を設置する大学など、多様かつ個性的な教育研究を展開させながら、社会のニーズや学問的要請に対応してきていることを明らかにした。

第6章では、社会的・政策的変化及び科学技術の飛躍的発展という二つの側面から学部・研究科の種類の変化の社会的背景・要因について考察し、時代の転換や社会的変革、設置審査方針の転換などが学部・研究科の種類の変化に反映されていること、科学技術の発展における趨勢や科学技術の進歩さらには学術振興政策や学問的環境の変化などが新しい分野の開拓や学部・研究科の種類の増加に大きな影響を与えていることを明らかにした。

終章では、本研究の成果として、第1に、戦後日本の大学教育における量的変化は全体としては2回の激増が目立ったのに対して、学部・研究科の種類の変化は80年代前半までの漸増とそれ以後の急増という形をとったこと、第2に、学部・研究科の大量増設や新設によって、学問研究における細分化・総合化・学際化といった傾向が進むとともに、大学教育が多様化・高度化・個性化してきたことを明らかにした。最後に、中国の大学教育の発展に対する示唆として、「現代化」の推進の必要性、国立と私立のバランスの要求、社会的要請に応じる学部・学科構成の必要性、のそれぞれについて具体的な提示を行った。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、主として、以下に述べるような3つの理由に基づき、従来の高等教育研究にみられないオリジナルな特色を有し、高等教育の学術的研究の向上に貢献するところが大きい研究成果である、と評価することができる。

- (1) 日本の大学教育の変遷や動向を裏づける学部・研究科の設置及びその種類の変化についての膨大なデータベースを作成したことである。学部・研究科の種類の変遷という観点から大学教育の展開を描こうとした着眼点もユニークであるが、それ以上に明治期から120年余りの長期にわたる大量のデータベースの作成は、個人の作業能力をはるかに超えるものであり、しかもそれを留学生という身で一人で完成させた努力と忍耐力は賞賛に値するものである。そのデータはいずれも今後の高等教育研究において活用できるものであり、その資料的価値と実際の意義はきわめて大きい。
- (2) 上記のデータベースに基づき、独自に戦後日本の大学教育の展開過程を4期に区分し、各時期ごとに学部・修士課程研究科、博士課程研究科の種類の変化について専門分野別に詳細な分析を行うとともに、個別大学の事例分析を加えながら、大学大衆化のプロセスをより明確にするとともに、多様化・高度化・個性化という大学教育発展の性格や特徴を明らかにしたことである。従来の高等教育研究では主として量的側面からアプローチであったのに対して、学科・専攻まで含めた専門分野の変化の側面から大学教育の展開過程を明らかにした功績は大きい。
- (3) 学部・研究科の種類の変化の社会的背景・要因を考察しながら、社会の変化や科学技術の発展による学問研

究の細分化・総合化・学際化の動向を明らかにしたことである。これまで学問研究の発展方向については一般的・概括的にとらえられてきたが、実証的データに裏付けられた具体的かつ分析的な考察は、大学教育のみならず広く学術研究の分野にも寄与するものであり、大きな意義をもつものといえる。

著者の問題意識の高さに比べ実証的に裏づけるための方法論は必ずしも十分ではないこと、多様化・高度化・個性化を基軸とした大学教育発展の構造的変化をとらえる分析枠組みが必ずしも明確でなく、そのため例えば社会的背景との関係においてやや焦点がぼやけてしまったことなど、今後の研究課題も少なくない。しかし、上記の3点において、きわめて学術性の高い優れた研究成果であり、著者の出身地中国の高等教育計画にも示唆を与えるほどの、高く評価されるべき内容を有している。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。